

「なぜ外国語を学ぶのか」 ——複言語・複文化科目初年度を担当して

泉水 浩隆

要旨

本稿は、2025年度春学期から新たに開講されることになった複言語・複文化に関する科目「なぜ外国語を学ぶのか」(新座キャンパス開講)の講義がどのように展開されたか、そのねらい、内容等を紹介するものである。単に言語学習に関するノウハウ的な内容のみを扱うのではなく、大学という場においてことばを学ぶ意義とは何か、複言語・複文化に触れることがなぜ必要なのかをあらためて考える機会を提供することを目指した。講義の構成や扱ったトピックは、「言語学入門」的なものであったが、事前に言語そのものに対する知識を求めたり、言語学に対する知識を前提としたりするようなことはしなかった。受講していくうちに、言語学の基礎的素養を身につけるとともに、複数の言語を学ぶ重要性や意義などに触れ、新たな言語を学ぶ時にも役立つヒントを得ることを目標とした。授業の形式は、基本的に講義形式であったが、途中ディスカッションのセクションを入れ、受講生間の意見交換の機会を持った。各回終了後にはCanvas LMS上にレジュメを掲出して、受講生自身が事後学習できるようにするとともに、リアクションペーパーの提出を求めた。

キーワード：複言語、複文化、言語学習、言語学

1. はじめに

本稿は、2025年度春学期から新たに開講されることになった複言語・複文化に関する科目「なぜ外国語を学ぶのか」の講義がどのように展開されたか、そのねらい、内容等を紹介するものである。

立教大学の言語系科目には、言語A(英語)と言語B(英語以外の多彩な言語)があり、言語Bについては2024年度から新カリキュラムが始動した。大学入学までに学んできた言語Aはさらにその運用能力を高め、新たに学ぶ人が多いであろう言語Bの各科目もことばそのものの運用能力を高めるとともに、当該言語圏に関する知識を深めるためのカリキュラムが組まれている。言語の学習において、言語運用能力を伸ばすことは言うまでもなく重要なことである一方、ただ単にことばが使えるようになる

という次元のみに留まっていることは好ましくない。そこで、「なぜ外国語を学ぶのか」という科目において、ことばを学ぶ意義とは何か、複言語・複文化に触れることがなぜ必要なのかをあらためて考え、大学という場での言語学習をより深化させるきっかけになる視点を提供するために、どのような講義をデザインしようと考えたか述べたい。

2. 講義の概要

2.1 ねらい

「なぜ外国語を学ぶのか」という科目は、1. で述べたように2025年度に新規開講となったもので、科目名が示すようにどのように切り込んで行くかは間口が広い。開講に先立ち、当該科目に関するワーキンググループ内で議論を重ねたが、取り上げるトピックや構成は担当者が扱える範囲や興味関心に応じて組み立てていくのがよいのではないだろうかという結論に達した¹。筆者の専門分野を考慮すると、「複言語・複文化」のうち、特に「言語」に焦点をあてて扱うのが最も適切であろうと考え、言語の持つ性質、共通性や多様性を紹介し、ことばというものを一般的かつ客観的にとらえ、受講生の多くが母語としているであろう日本語²、比較的長い間学習を続けている英語、さらに言語Bやその他の言語、それぞれをあらためて見直し、単に言語を学ぶためのノウハウ的な内容ではなく、ことばの持つ「なぜ」にフォーカスして、複数の言語を学ぶ重要性や意義を考える機会になるようにした。

2.2 受講者

本科目の受講者数は54名であった。新座キャンパス所属の全学部・全学科の学生が登録しており、特にコミュニティ福祉学部および現代心理学部の学生が多く参加していた。学年については、科目の性質上、1年生が大多数であったが、2～4年生の受講生もいた。

2.3 構成と内容

2.1で述べたように、本科目は「言語」というものが一般的にどのような性質を持ち、さらにどのような点で共通性を持っているか、それと同時に、いかにバラエティに富み、多様性を示すものであるかを俯瞰的にとらえることができるようになることを意識した。受講生の多くは既に日本語および英語の知識は十分あるものと想定されるが、「複言語・複文化科目」である以上、これに加え、言語Bとして開講されてい

1 筆者が担当した科目は新座キャンパスでの開講科目であったが、別の教員が担当する同一名称の科目が池袋キャンパスでも開講された。名称は同じであるものの、このような観点からそれぞれが準備を進めたため、当然構成も内容も異なる。本稿では、新座キャンパスで開講された科目のみについて言及している。

2 科目名には「外国語」と入っているが、留学生にとって日本語は外国語であり、また、日本語を母語とする学生には日本語も言語の一つとして眺める機会を持ってほしいと考えた。したがって、講義の際には、日本語について扱う機会もしばしばあった。

る言語やそれ以外の言語もいろいろと例として紹介することを試みた。言語Bは学び始めたばかりである受講生が大半であると考えられたので、言語そのものに対する知識を求めたり、言語学に対する知識を前提としたりするようなことはせず、ことばそのものに対する関心を持っていることを受講に当たっての望ましい条件とした。最終的には、言語学の基礎的素養を身につけるとともに、複数の言語を学ぶ重要性や意義などに触れ、新たな言語を学ぶ時に役立つためのヒントを得ることを目標とした。

講義は以下のようなトピックと内容で進めた。かっこ内にはその回に用いた主な参考文献を示す。その他にも、講義全体を通し、齋藤 (2010)、高橋ほか (2021)、Yule (2020) を適宜参照した。

【第1回】 イントロダクション：「複言語・複文化」の考え方を紹介し、ことばの多様性の観察、ことばの仕組みをさまざまなレベルで考える、自分の知っている言語・学んでいる言語の特徴を客観的に見る、ことばを知る重要性の再確認といったトピックを通して、今後の授業の方向性を示した。

【第2回】 ことばと音 (1)：ことばで使われる音の種類、どこで、どのように音が作られるか、作られた音はどのような性格を持ち、どのように伝わるか、伝わった音はどのように理解されるかなどについて、音声学的立場から解説した (Ashby & Maidment, 2005; 川原, 2018; Reetz & Jongman, 2020; 齋藤, 2006)。

【第3回】 ことばと音 (2)：音の「システム」、音の「並び」、音を構成する「要素」を扱い、音韻論で扱われる基本的事項を説明した (Carr & Montreuil, 2013; Odden, 2005; 齋藤, 2006; Saussure, 1995)。

【第4回】 語の組み立て：「意味」を持つ最小単位は何か、形態素の種類、語形成、生産性等を扱い、形態論の導入を行った (Aronoff & Fudeman, 2011; 齋藤, 2010; Martinet, 1996)。

【第5回】 文の組み立て (1)：文はどのように出来ているか、数、性、格などの統語論の基本的概念について説明した (齋藤, 2010; 千野, 1986; 東京外国語大学 (n.d.-b))。

【第6回】 文の組み立て (2)：人称、時制、相、法、態など統語論の基本的概念について、スペイン語、イタリア語、フランス語、中国語、インドネシア語などの例を引きながら、説明した (齋藤, 2010; 東京外国語大学 (n.d.-a))

【第7回】 文の組み立て (3)：文法・統語論の歴史的流れを振り返り、現代言語学への歩みを概観した。具体的には、伝統文法、ソシュールの提示した主な概念、プラハ学派、アメリカ構造主義、生成文法等を扱った (Carnie, 2013; 太田・梶田, 1974; 田中ほか, 1975; 渡辺, 2009)。

【第8回】 ことばの意味：「意味」(語・文レベルでの「意味」、コンテクストを含んだ「意味」とは何か考え、意味論・語用論の基本的概念を例を用いて説明した (池上, 1978; 池上, 1985; 今井, 2001; Saussure, 1995)。

【第9回】 いろいろな文字：文字とは何か考え、さまざまな言語の文字とその特徴を紹介した (クルマス, 2014; 鈴木, 2020; 世界の文字研究会, 2009)。

【第10回】ことばの系統：共通する祖語や語族、音対応などを扱い、比較言語学について触れた。ロマンス諸語を例にことばの移り変わりを観察した (Aitchison, 2013; Hualde et al., 2010; Pöckel, 2003; 菊田ほか, 2015; 吉田, 2005)。

【第11回】ことばのバリエーション (地域差・世代差)：ことばの地域差、ことばの社会的な差異、ことばの世代差など、ことばにどのような差異が見られるか、言語地理学における分析方法の実例を含め解説した (大西, 2016; 金水, 2007, 2011, 2023; 泉水, 2009a; 松本, 1993; 三原, 2004; 柳田, 1980; Labov, 1982)

【第12回】ことばの接触：複数のことばが接触すること、二言語併用、ダイグロシア、ピジンとクレオールなどの現象について触れた (重松, 2007; 杉本, 2010; 渡邊, 2013; Ferguson, 1959)。

【第13回】ことばを学ぶ・ことばを教える：日本における第2外国語教育を巡る諸問題について、現状や要点、今後の展望等について述べた (大谷ほか, 2004; カイトほか, 2002; 柿原, 2012; 川又, 2014; 北村ほか, 2016; 金, 2014; 泉水, 2009b; 泉水, 2018; 田中, 2012, 2013; 西山, 2014; 林田, 2014)。

各回は基本的に講義形式であったが、各回の講義の間に複数回ディスカッションのテーマを与え、筆者が受講生の間を回りながら意見を求めた。マイクを向けられた受講生は多少戸惑いながらもいずれもきちんと答えてくれ、当初予想していた以上に活発な議論が行われた。

各回が終了した後、授業中に用いたプレゼンテーションのファイルをレジュメとしてCanvas LMS上に掲出し、そこに入門的・啓蒙的なものからやや専門的な内容を含むものまで、さまざまな参考文献も示して、必要に応じて事後学習を進められるようにした。これとともに、第1回と第13回を除き、各回終了後にはCanvas LMS上に振り返り課題を掲出し、リアクションペーパー (A4用紙1枚程度) の提出を求めた。リアクションペーパーのうち、興味深い指摘があったものについては、筆者名が分からないようにして、次の回の冒頭に紹介するとともに、前回の内容を踏まえたコメントを加えた。

最終回となる第14回は、筆記試験を行った。

2.4 評価

本講義の評価は、筆記試験80%、平常点20% (うち、リアクションペーパー15%、授業参加度5%) の割合で行った。

3. 結びに代えて

開講初年度ということもあり、全体としてどのような到達点を設定するか、どのトピックをどの程度まで扱うかは、最後まで逡巡する点があったものの、言語というのがどのような性質を持っているものなのか、複数の言語を学ぶことにどのような意義があるのかという点については、おおよそその理解が得られたのではないかと考えて

いる。本稿執筆中に「授業評価アンケート」の結果が届いたが、その反応を見ても、比較的好意的に受け止められたように思われる。一方で、言語に関する専門的な内容が分かりづらかった、あるいは、リアクションペーパーの分量とメ切にもう少し余裕が欲しかったという意見もあったので、トピックのラインナップと合わせて今後の見直しの課題としたい。

参考文献

- 池上嘉彦 (1978) 『意味の世界—現代言語学から見る』NHK ブックス.
- 池上嘉彦編 (1985) 『意味論・文体論』大修館書店.
- 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』大修館書店.
- 太田朗・梶田優 (1974) 『文法論II』(英語学大系 4) 大修館書店.
- 大谷泰照・林桂子・相川真佐夫・東眞須美・沖原勝昭・河合忠仁・竹内慶子・武久文
代編著 (2004) 『世界の外国語教育政策・日本の外国語教育の再構築にむけて』
東信堂.
- 大西拓一郎 (編) (2016) 『新日本言語地図』朝倉書店.
- カイト, 由利子・沈国威・杉谷眞佐子 (2002) 「外国語学習に関する意識調査—学生に
よる質問票調査から」『関西大学外国語教育研究』第3号, pp. 93–121.
- 柿原武史 (2012) 「大学における英語以外の外国語教育の存在意義—スペイン語教育
の取り組みを通して考える—」, 関西言語文化教育研究会研究論集編集委員会
(編), pp. 95–116.
- 川原繁人 (2018) 『ビジュアル音声学』三省堂.
- 川又正之 (2014) 「日本の異言語教育政策を考える (2) —中等教育における英語以外
の異言語教育について」『敬和学園大学研究紀要』第23号, pp. 55–71. 関西言
語文化教育研究会研究論集編集委員会編 (2012) 『言語文化教育学の実践』金星
堂.
- 菊田和佳子・二宮哲・西村君代編 (2015) 『スペイン語学概論』くろしお出版.
- 北村亜矢子・廣康好美・正木晶子 (2016) 「初習外国語の教育課程に求められるもの：
ドイツ語、フランス語、スペイン語履修者への意識調査結果の比較と考察」
『Lingua』第26号, pp. 131–149. <https://doi.org/10.69341/2016146>
- 金菊熙 (2014) 「韓国の第2外国語科公教育政策の変遷と現状」『言語文化研究』第33
号第2号, pp. 45–89.
<https://matsuyama-u-r.repo.nii.ac.jp/record/2322/files/KJ00009158321.pdf>
- 金水敏編 (2007) 『役割語研究の地平』くろしお出版.
- 金水敏編 (2011) 『役割語研究の展開』くろしお出版.
- 金水敏 (2023) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店.
- クルマス, フロリアン (2014) 『文字の言語学：現代文字論入門』斎藤伸治訳. 大修館
書店.
- 斎藤純男 (2006) 『日本語音声学入門』【改訂版】三省堂.

- 斎藤純男 (2010) 『言語学入門』三省堂.
- 重松由美 (2007) 「在日ブラジル人若年層の使用する日本語における形態的統合」『ラテンアメリカ研究年報』第27巻, pp. 59–85.
https://doi.org/10.51100/annualofajel.27.0_59
- 杉本豊久 (2010) 「明治維新の日英言語接触：横浜の英語系ピジン日本語 (1)」『Seijo English monographs』第42号, pp. 357–381.
- 鈴木薫 (2020) 『文字世界で読む文明論：比較人類史七つの視点』講談社.
- 世界の文字研究会編 (2009) 『世界の文字の図典 普及版』吉川弘文館.
- 泉水浩隆 (2009a) 「Atlas lingüístico-etnográfico de Andalucía (ALEA) における vino turbio, vino repuntado, heces del vino, heces del aceite を表す語の分布について」『福岡大学研究部論集A：人文科学編』第9巻7号, pp. 53–65.
- 泉水浩隆 (2009b) 「日本 (の大学) における第2 外国語教育をめぐる現状と課題：スペイン語教育を中心に」『学苑』No. 821, pp. 43–52.
- 泉水浩隆編 (2018) 『ことばを教える・ことばを学ぶ：複言語・複文化・ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) と言語教育』行路社.
- 高橋留美・大塚みさ・杉本淳子・田中幹大 (2021) 『やさしい言語学』研究社.
- 田中一嘉 (2012) 「言語教育と異文化理解教育のインターフェイス—大学教養教育における初級ドイツ語教育の場合—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第61巻, pp. 111–121.
- 田中一嘉 (2013) 「外国語教育と言語教育—日本の学校教育現場における言語教育の諸問題—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第62巻, pp. 85–96.
- 田中春美・家村陸夫・五十嵐康男・倉又浩一・中村完・樋口時弘 (1975) 『言語学入門』大修館書店.
- 千野栄一 (1986) 『外国語上達法』岩波書店.
- 東京外国語大学 (n.d.-a) 『東京外国語大学言語モジュール インドネシア語 文法モジュール』最終閲覧日 2025年5月22日, <https://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/id/gmod/contents/explanation/206.html>
- 東京外国語大学 (n.d.-b) 『東京外国語大学言語モジュール フスハー (正則語) 文法モジュール』最終閲覧日 2025年5月14日, <https://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/ar/gmod/contents/explanation/099.html>
- 西山教行 (研究代表者) (2014) 『新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で利用できる共通言語教育枠の総合研究』平成23年 (2011年) 度—平成26年 (2014年) 度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (A) 研究課題番号：23242030 研究成果報告書.
- 林田理恵 (2014) 「ロシア語学習者の学習動機づけ」西山教行 (研究代表者) 『新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で利用できる共通言語教育枠の総合研究』 (pp. 47–52).
- 藤田友尚 (2010) 「複言語主義が社会科学系の学生に対する第2 外国語教育にもたらすもの」『言語と文化 (関西学院大学言語教育センター紀要)』第13号, pp. 71–

87.

藤原三枝子 (2010) 「大学における「基礎ドイツ語」の学習動機に関する量的研究：学習開始動機, 外国語学習に対する心理的欲求の充足および動機づけの内発性・外発性に関する調査」『言語と文化』第14号, pp. 81-113.

松本修 (1993) 『全国アホ・バカ分布考』新潮社 (新潮文庫).

三原京 (2004) 「英語における女性語について」『近畿大学語学教育部紀要』第4巻1号, pp. 145-160.

柳田國男 (1980) 『蝸牛考』岩波書店 (岩波文庫版).

吉田和彦 (2005) 『比較言語学の視点：テキストの読解と分析』大修館書店.

渡辺明 (2009) 『生成文法』東京大学出版会.

渡邊絢子 (2013) 「カリブ海域のクレオール言語」『東京女子大学言語文化研究』22, pp. 66-79.

Aitchison, J. (2013). *Language Change: Progress or Decay?* (4th ed.). Cambridge University Press.

Aronoff, M., & Fudeman, K. (2011). *What is Morphology* (2nd ed.). Wiley-Blackwell.

Ashby, M., & Maidment, J. (2005). *Introducing Phonetic Science*. Cambridge University Press.

Carnie, A. (2013). *Syntax: A Generative Introduction* (3rd ed.). Wiley-Blackwell.

Carr, Ph., & Montreuil, J.-P. (2013). *Phonology* (2nd ed.). Palgrave MacMillan.

Ferguson, Ch. A. (1959). Diglossia. *WORD*, 15(2), 325-340.

<https://doi.org/10.1080/00437956.1959.11659702>

Hualde, J. I., Olarrea, A., Escobar, A. M., & Travis, C. E. (2010). *Introducción a la lingüística hispánica* (Segunda edición). Cambridge University Press.

Labov, W. (1982). *The Social Stratification of English in New York City*, Center for Applied Linguistics.

Martinet, A. (1996). *Éléments de linguistique générale*. Armand Colin.

Odden, D. (2005). *Introducing phonology*. Cambridge University Press.

<https://doi.org/10.1017/CBO9780511808869>

Pöckel, W., Rainer F., & Pöll B. (2003). *Einführung in die romanische Sprachwissenschaft*, Versión española de Sánchez Miret, F., *Introducción a la lingüística románica* (Gredos, 2004).

Reetz, H., & Jongman, A. (2020). *Phonetics: Transcription, Production, Acoustics, and Perception* (2nd ed.). Wiley Blackwell.

Saussure, F. de. (1995). *Cours de linguistique générale*. Éditions critique préparée par Tullio de Mauro. Payot.

Yule, G. (1996). *Pragmatics*. Oxford University Press.

Yule, G. (2020). *The Study of Language* (7th ed.). Cambridge University Press.